岐阜県東濃地区における子育て支援センターの現状と課題

―「子育て支援者トーキング研修」を通じて―

今村民子（笠松町ことばの教室）
居﨑時江（大垣女子短期大学）
高田全代（大垣女子短期大学）
徳広圭子（岐阜聖徳学園大学短期大学部）
今村光章（家政教育講座）

1　はじめに

子育て支援という用語はなじみのある言葉となり，具体的な子育て支援活動もよく知られるところとなった。昨今では，国や自治体，民間の機関をはじめ，さまざまな機関が子育て支援活動に乗り出している。

だが，その中心的な役割を期待されているのは，なんといっても地域子育て支援センターである。子育て支援が多義的になり，子育て支援活動もきわめて多様になったとはいえ，地域子育て支援センターは，子育て支援活動の主導的役割を果たす重要な機関である。

したがって，地域子育て支援センターでどのような活動が行われているのか，また，今後の発展と活動の展開に向けてどのような課題があるのかを調査し，将来の子育て支援活動の発展の可能性を探ることは非常に重要な課題である。しかも，子育て支援活動が地域に根ざすものであることから，それぞれの地域特有の現状と課題を明らかにすることも重要である。

以上のような観点から，岐阜県全体の子育て支援センターの現状の調査について，すでに，今村光章・今村民子は，2004年に「地域子育て支援センター事業従事者に関する研究―岐阜県における調査・事例研究を通して―」（家庭教育研究所紀要　第26号），および，2005年に「岐阜県における子育て支援センターの現状と課題」（岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究　Vol. 7）において，統計的な調査を行ってきた。

しかしながら，上記の二つの調査は岐阜県全域にわたる統計的な研究であり，量的データとして活動を把握することはできたが，県レベルよりもさらにミクロな視点で，なおかつ質的な面で，子育て支援センターとその事業に従事する職員たちの課題を明確にすることはできなかった。

とりわけ，岐阜県には，いわゆる5圏域という圏域があり，それぞれに事情が異なると予測されるものの，そうした圏域ごとの質的な差異については十分に調査できていなかった。

そこで，本稿では，岐阜県の5圏域のひとつである，東濃地域（多治見市・土岐市・瑞浪市・恵那市・中津川市）における各地域の子育て支援センターで実施されている子育て支援事業の現状と課題を質的に把握したい。なお，他の2圏域（西濃圏域・岐阜圏域）については，別の論文においてまとめており，残りの2圏域（高山圏域・中濃圏域）についても，今後調査を進める予定である。

こうした調査研究にあたっては，まずは，子育て支援センター（以下，センターと略記する）の施設長に郵送で調査用紙を配布し，それをまとめることに加え，地域子育て支援センター事業に従事する職員（以下，支援者と記す）対面して，それぞれのセンターの事業について聞き取り調査をおこなった。この聞き取り調査をかねた研修の機会提供を，サブタイトルにあるように「子育て支援者トーキング研修」と称している。

上記の方法で，東濃地域における子育て支援センターの現状を把握するが，その理由のひと

つは，都市部の状況と郡部の状況は非常に異なると予測されるからである。しかも，同じ県内であっても，地域性から，それぞれのセンター独自の悩みを抱えていることも多いと予測したからでもある。

さらに，実際に支援者と面談をし，グループで討議をすることによって，地域の抱える生々しい子育て支援の問題を浮き彫りにし，岐阜県の子育て支援に関する提言をしたい。

2．東濃地区の子育て支援センターの概況

地域子育て支援センターの現状と課題は，地域によって非常に異なる。その地域に応じて，センター独自の特性や課題，悩みや研修の必要性がある。そのため，2008年2月4日に東濃地区の地域子育て支援センター16箇所に質問紙を送付し，各センターの概況と課題を把握することを試みた。

質問紙はＡ４用紙２枚にわたるもので，回答欄は省略するが，次の項目と枠を設け，記入していただいた。

記入項目

（１）支援センター名（併設型の場合，保育園名等）
（２）開設日
（３）開設時間
（４）支援の内容
（５）一時保育の実施の有無
（６）機関紙の発行（機関紙名，発行回数など）
（７）支援センターとしての悩みや状況など

その結果，同年の2月末までに，14箇所から回答を得た。(1)から(6)の各センターの概況については章末に表としてまとめた。こうした圏域ではおおよそ似たような活動内容になっていることが分かる。これについては，すでに冒頭の二つの先行研究で明らかにしたことにさらに加えて特筆すべき点はない。

他方，(7)の支援センターとしての悩みや状況などについては，センター名が推測できないように配慮して，以下のように著者の責任でまとめた。字句の訂正や文末表現の統一，一部の省略があるが，内容はほぼ記述内容と同じである。また，記載順は，章末の表の順とはまったく関係なく，著者の責任で列記する。

各センターの課題は次のようにまとめられる。

（１）施設に不備がある。部屋が狭く，一時保育と施設利用者が同じ部屋になる。とくに，併設型のため通常の保育を実施しているなかに発達障害の子どもがおり，その子どもの行動を利用者に理解してもらうことが困難である。

また，若いお母さんに対する対応の仕方（たとえば，施設利用の方法についてどのように説明するか）が分からない。全体として相談件数が減っている。

（２）支援室と相談室が一緒なので，相談している最中に，センターに遊びに来られた利用者がいると別の場所に移動しなければならないため，話が中断してしまう。

（３）施設が充分に整っていない。職員数が不足している。保健センターや他の支援センターなどとの連携がきちんとできていない。サークル活動支援など支援センターへ来園する人のみの活動が多く，来ない人への支援はほとんどできていない。

（４）予算が少ない。職員が少ない。

（５）他のセンターとの交流，職員の研修の場が充分に保障されると良い。保健センターなどの関係機関との連携がとれることが望ましい。

（６）言葉が出てこない子，言葉の遅れがある子，多動傾向のある子，気持ちが切り替えられずパニックを起こす子など，母親にとって心配な子，手のかかる子が多くなっているので対応が大変である。

母親のマナーが悪く，絵本の読み聞かせをしている時や職員が話をしている時でも，大きな声でおしゃべりをして，まわりに迷惑をかけていることに気づかない親が増えてきている。子どもから目も手も離しておしゃべりに夢中になっている。危険に対する認識も薄い。全体的に親が受身になっている。しかも，時間にルーズである。

イベント好きであるのはいいのだが，保健センターの乳幼児健診などで知り合った親がグループでサロンなどに参加してくるため，初めて来

た人や一人で来所された人に居心地よく過ごしてもらうことが難しい。

地域に出向くおしゃべりサロンを行ったが，周辺には大変アパートが多く，広報の折り込みや，地域の回覧板では周知ができない。家に閉じこもっている親子も多いと思われるが，どう働きかけていくことができるだろうか。効果的な周知方法を模索している。

（７）センターに来られない親さんへのPR方法を考えたい。知らせ方に悩む。

（８）毎週楽しみに来園している親子はいいのだが，行事だけしか来ない親がいる。普段の友達づくり，リラックスタイムに利用してもらえればよい。話を聞く時の態度がよくない親もいる。

（９）行事などを計画した日は出席率がいいが，いつもの活動日は決まった方がみえる。もう少し近所に友達のいない子に来ていただきたいと思うが，来て下さらない方もいる。

（10）行事（クリスマス会など）では，参加して下さった親子さんで部屋がいっぱいになりとても狭い。遊戯室など，広い部屋の使用も考えるべきである。

また，０～１歳児は人数が多く，開催日の検討が必要である。子どもから目を離し，親同士のおしゃべりばかりが目につくことが多い。もちろん，大切な時間だと思うが，親さんに注意すべきことを伝えることの難しさをつくづく感じている。

（11）周囲には対象となる親子さんは少ないが，ほとんどの親子さんはセンターを利用されているようだ。他に親子で遊べる施設もないし友達も近所にはいいので，週1回の開催日を楽しみにされている。

（12）毎週15組前後の親子がみえ，お話や情報交換などしている。自分達で出来る仕度や片付けなどは進んで行ない「みんなでやろう」という気持ちを持っている人も，少しずつですがみえるようになった。

（13）子どもとのかかわり方や，親に対する指導をどのように行なっていったらよいか悩む。利用する親が固定してくると，グループ化したりして話に夢中になり，子どもを見ない親がいる。

（14）子育てに不安をもっている親や引き籠る親に対してどのようにしたら支援センターの存在を知らせ利用してもらえるようにできるかが課題である。

以下の表のように課題を集約できる。

東濃地区の子育て支援センターの課題

（１）ハード面の課題（施設・職員数・予算）
（２）親のマナー指導の問題
（３）職員の研修の課題（子育て相談の研修）
（４）他機関との連携
（５）広報活動

では，こうした課題にどのように対応すればよいのであろうか。

ハード面の問題，とりわけ施設や設備の充実については，おそらく，各自治体や行政に訴えるしか有効な方法はないだろう。そのためには利用者を増やし，センターの重要性を広く認識していただく必要がある。子育て支援活動の拡充をすることが大切である。

また，親のマナーの問題は深刻化しているといえるだろう。子どもに対しての指導ではなく，親に対する指導をどうするのか。子育ての専門家である保育者(保育士・幼稚園教諭)が，どのように親を指導するのかについては今後の大きな課題となる。たとえば，センターの支援者の研修について，大学をはじめとする研究機関や学会等が，積極的に子育て支援者の研修を企画する必要があるだろう。あるいは，同輩集団で切磋琢磨する機会を設けていくことが重要である。地域に根ざす大学として岐阜県内の大学もこうした課題に応える必要があるように考えられる。

他機関の連携については，各支援センターが独自に努力するほか，他機関がセンターとの連携の必要性を認識するような働きかけが必要である。

子育て支援センターの存在を広報することについては良案が見当たらない。現在の広報誌による広報や自治体の広報誌による広報を期待し，漸次，口コミで広がっていくのを待つしかないだろう。

こうした反省点や課題が見える一方，かつてのように「支援活動として何をしていいのか分からない」といった回答はまったく見られなくなった。子育て支援活動が一定の社会的認知を受け，一般的なプログラムや内容が定着したためであると考えられる。

3．支援者対象のアンケート結果

前述の調査と同様に，東濃地区の子育て支援センターに調査用紙を送付し，支援者対象のアンケートを実施した。

東濃地区にある支援センター16箇所に4部ずつ送付し，14箇所から合計33通の回答があった。また，支援者対象の研修会でも直接面談して課題をまとめた。以下はその結果を簡潔にまとめたものである。なお，アンケートの用紙については本稿の末尾に掲載した。

以下，結果と考察を簡単に記述する。

回答者のほとんどが（94%）が子育て支援場面で直接親子とかかわっている人である。最初に，センターに訪れた親子への声かけの実態を調査するために，「支援の流れの中で，いつ，だれに，どのような声かけや目配りをしているのか」を調査した結果，第一声は，52%の支援者が子どもに向けて話しかけており親に向けて話しかける12%よりは，はるかに多い。

親子で遊んでいるときは，場面に応じてということなのか，「どちらともいえない」が58%であった。親に対しても子どもに対しても同じように声かけしている様子が伺える。

支援センターを出る際に最後に声をかける対象は，子どもに40%，親に27%，どちらにも33%であり，時間をともに過ごして緊張感も少なくなったため，支援者が親に声かけやすくなっている様子がわかる。

さて，支援者としての姿勢について尋ねたところ，「傾聴する姿勢を大切にしている」(91%)が最高であるが，それだけでいいのかと考えている支援者も39%存在する。親に対して何らかの指導を念頭においていると考えられるが，一方では「親には何もいえない」が24%もある。「つい自分の考えをいってしまう」も24%ある。聴く側に回ろうとしながらも，つい口を出して反省したり，逆に，口を出せなかったりしてヤキモキしている様子が伺われる。詳しくは表1を参照されたい。

ただし，「困ったことがあったとき親にも子どもにもしかる」は39%もあり，叱る支援者がいることも判明した。親の話しを丁寧に傾聴し，受け入れる姿勢が一番大切であると考えてはいるが，支援者自身の考えも伝えたいというところであろう。

支援者は，「保育士としての立場で意見をいってしまうのでそれが親の負担にならないか心配」「親としては話にくいことを話される時は，信頼関係ができてからでないと難しい。初めて来所した親やときどきしかこない人には関係ができていない分，対応に苦慮することが多い」「園に入る前にこんなことができたらいいと思いがあってつい親に言ってしまっている」「支援者としてロベタであり，専門的知識が不足していることが気になっている」などと考えているようだ。

こうした悩みは相談業務に関する不安であるといえよう。実際，相談を受けることに不安がある支援者は61%にものぼっている。逆に言えば，支援者が専門的な相談技術の研修を受ける機会は少なく，今までの経験の範囲で行われているのが現状である。この点は今後の課題である。

それでは，支援者の立場からは，親の態度はどのようにみえるのであろうか。執筆者のひとりである今村民子は，平成15年度に「子育て支援者のトーキング研修会」（主催は岐阜県中央子ども相談センター）を岐阜地区で始めたときに，同様のアンケートをしたが，結果はそれとまったく同様であった。詳しくは表2を参照されたい。

つまり，親に対しては「受身である」「育児に自信がない」の項目が高く，「積極的に参加する」や「自主的に活動する」という項目は低かったのである。

こうした意見に加えて，支援者は，「受け身にさせない支援が必要」「子どもとのかかわりがわからない親がふえている」「父親の支援も必要だ」と考えていることが判明した。親は子の5年でそれほど変化していないように考えられる。

表１　支援者として大切な態度

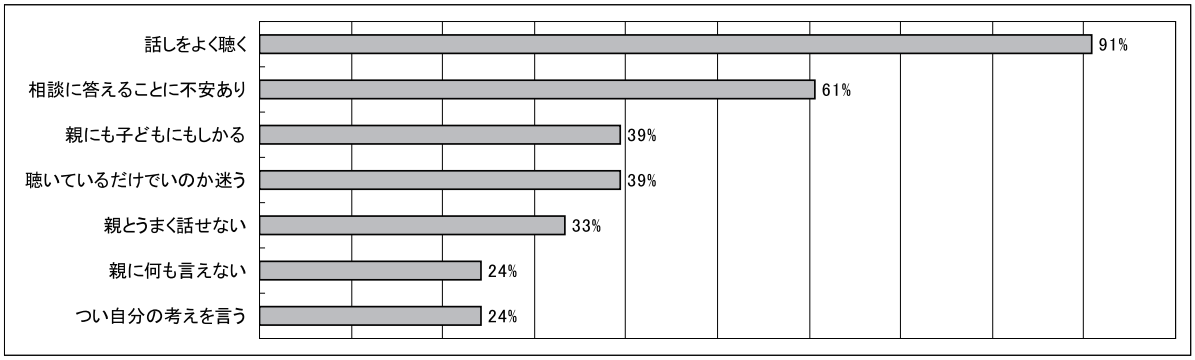
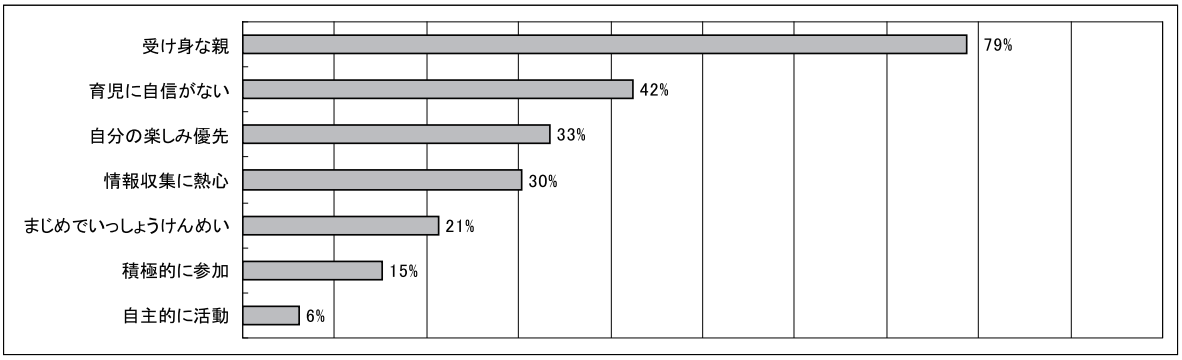


表２　どのような親が増えてきたか



子育て支援は非常に一般化し，なじみのあるものとはなった。もちろん，子育て支援とは，一般に親（養育者すべてを含む）の肉体的かつ心理的な負担感を減らすことが第一の目的であるが，親が受動的にサーヴィスを受け取る子育て支援事業の消費者となるような態度になってしまうと，子育てを支援するという本来の目的を外れてしまうおそれがある。

たとえば，育児に自信がないという気持ちをもつ親に対しては，心理的負担を減らす配慮（支援）が必要であるが，だからといって支援センターに子どもを連れてきて，支援者にまかせっきりというのでは問題があるといえるだろう。積極的に子育てに取り組むように親を支援するということは，困難だが取り組まねばならない課題なのである。

ところで，支援センターの社会的認知に関しては，「支援センターにでてこられない親がいることが問題である」と考えている割合は59%，支援センターのことを知らない親がいると思っている割合は48%で半数近くが認知不足ではないかと心配している。もちろん，各自治体や国が広報をすべきであって，特別な予算が計上されない限り，センター独自の広報誌を出すなどの余裕はないだろう。それぞれのセンターが工夫を凝らすこともちろん大切ではあるが，社会全体として，子育て支援センターの社会的認知度を向上させる取り組みが必要である。

そうした社会的認知を促進する対策として，国からも提案され始めている訪問事業を提示して，支援者にその必要性を尋ねたところ，参加するべきは36%で比較的低い割合であった。また，保健部門など他部署が対処したほうがいいのではという考えも提示してみたが，賛成は9%ととても少なかった。

子育て支援については出てこられない人の対策についても地域支援センターが担うべきだという責任感をもっているが，対策としてよい方策は全くわからないという姿があった。この点については今後の課題となるであろう。

また，「他部署につながりが少ない」「地域に根ざした支援が必要」「地域の特色に合った形が必要」「支援センターの存在を知らない親や家庭に引きこもっている親については，今の段階では来れない親が，できるだけ来れるようになるといい」という意見があった。

支援者としての願いのひとつを，親教育の視点から提案してみた。親として子育てを学ぶ考えに賛成は84％と高かった。家庭科教育における保育教育の充実など，親になる前の準備教育も必要であろう。

最後に，子育て支援と従来の通常保育とどちらがむいているかを尋ねた。支援者の方には大変失礼な質問であったが，親相手が苦手かどうかを尋ねたいという意図があり，あえて尋ねた。通常保育のほうが向いているという回答が10％に上った。通常の保育の形態の勤務に戻り，子どもだけを対象にしたい支援者は少ないとみるべきかどうかは難しい。こうしたアンケートが施設長の目に触れることを恐れて，正直な回答が不可能だった可能性もある。保育所や幼稚園の保育者であった支援者がセンターで満足しているのかについては更なる調査が必要である。

そもそも支援者は，支援者になるためにその職を選んだのではなく，しかも，その訓練を受けてきたわけではない。保育者としての経験をかわれて，偶発的な機会で，意図せざる結果として子育て支援業務にかかわっていることが多い。そうした支援者に対してどのような支援をしていくか。子育て支援が今後充実したものになるかどうかは，そうした支援者をいかに支援していくかにかかっているといえるだろう。

総合的に見れば，支援者の課題は次の三点にまとめられる。

第一に，支援者としての専門的知識が不足し，研修の機会がないことが問題である。しかも，支援者として，親に対してどのような指導をするべきか悩んでいるといえよう。

第二に，支援者は，最近の親を受け身にさせない支援が必要であると考えている。つまり，子育て支援事業の受動的消費者にならないように配慮する必要があるといえるだろう。しかも，子どもとのかかわりがわからない親がふえているので，その点にも配慮が必要であると感じている。

第三に，支援センターのあり方について，他機関との連携が必要であり，しかも，地域に根ざした支援が必要であると考えている。また，支援センターの存在を知らない親や家庭に引きこもっている親についても配慮が必要と考えていることが明らかになった。東濃地区は比較的農村部であり，地域でのつながりが深いように見受けられるが，実はセンターの存在がそれほど知られていないという現状が明らかになった。地域での広報などをさらにすすめる必要があるだろう。

最後に，東濃地域独自の問題点を探ってみたが，独特の課題はなく，公共交通機関が発達していないためほとんどの来所者が車でくるため駐車場の問題があるという程度にすぎなかった。結果としては，この地域独自の問題をさほど発見できなかった。

ところで，東濃地域の「地域子育て支援センター連絡会」の存在と経緯についてここで述べておこう。

岐阜県の単独事業として平成13年度から5年間，地域子育て支援強化事業が実施された。県内の5カ所の子ども相談センター（児童相談所）を子育て支援の拠点にして行われた事業の中で，東濃子ども相談センターが発案したのが「支援センター連絡会」であった。

第１回目は平成13年９月13日に行われ，東濃地域の全部の地域子育て支援センターに対して，子ども相談センターが召集する形で始まったが，２年目の平成14年度からは各支援センターが当番制で企画をするようになり，４年目には「東濃地域子育て支援センター連絡会規約」を作成して独立し，地域子育て支援センター職員が運営をするようになった。

年間３回の連絡会を開催し，内容については役員会で決定している。こうした地域子育て支援センターだけの連携を図って研修の場をつくっているのは岐阜県内でも東濃地域だけである。何よりも支援者（担当職員）の大切な研修の場であり，力量を高めるための時間になっている。その成果は次のようにまとめられる。

（1）支援活動の交流の場になっている。
職員が数年で変わるため担当者の紹介をして，支援の内容の交換が行われている。親子で作って人気のあった手作りおもちゃを広めることで，職員の研修希望に応えている。
（2）専門的な知識を学ぶ場になっている。
子育て支援に必要な虐待予防の知識，相談を受けるための姿勢などについて，講師を招いての講演会が行われている。専門的な内容についての研修の場になっている。
（3）支援センター業務が保育園・幼稚園に広く浸透してきている。
連絡会の内容を園長会で報告するため，支援センターのない保育園，幼稚園でも理解されるようになってきている。

以上のような連絡協議会が他の圏域にもできれば，センターの支援者の研修も進むばかりか，他の諸機関との連携も進むように考えられる。

4．子育て支援トーキング研修の内容とまとめ

平成20年1月17日（木）1時30分から4時まで，瑞浪市稲津コミュニティーセンターにおいて，東濃地区の支援センター職員13名，および，執筆者　5名（計18名）で，2グループに分かれて，「子育て支援者トーキング」をおこなった。これはそれぞれの支援者の現状と課題を質的に調査することに加え，意見交流を行うことで支援者の研修ともなることを狙いとしている。

このトーキングでは，テーマ「子育てをしている親に必要なものは何か？」で，それぞれ支援者の意見をポストイットに書き出してもらい，KJ法で整理しながら，重要なものから順に並べていただいた。

そのKJ法の結果と当日の執筆者のメモによって，「子育てをしている親に必要なもの」については，支援者がどのように考えているのかを再構成した。二つのグループの結果はおおよそ次のようになった。

Aグループ

第一に，「**親の仲間作り**」が必要である。

どうしても親も仲のよい者同士でかたまってしまう傾向がある。他の親と関わりあおうとする力が欲しい。最初から，仲のよい者同士でいるのをみるとなかなかそれらに入っていくことができないようである。新しく来た親が，他の親と関わりあうことができるように，支援者も雰囲気作りに心がけている。しかし，支援者だけでなく，親同士にもそうした配慮が欲しい。

もっとも，自主サークルを親同士でつくりあげる傾向がある。支援者も，それらのサークル作りをサポートする動きがある。それはいいことである。

支援者だけでなく，（子どもがある程度成長した後の）親から，ボランティアスタッフとして，協力をえるのも大切だろう。様々な背景を持つ，多数の親を対象とした場合，支援者のコミュニケーション能力が必要になってくる。

親は，気楽な悩みしか言い出せない。支援者から見て，懸念されるようなケースほど，親たちは，相談に来ない。話しやすい環境作りが大切。結論を出すのではなく，傾聴が必要。

ただし，支援者であるからといって，上から見てはいけない。それぞれの親には，それぞれの思いがある。親のニーズを見極めることが大切だ。親も家にこもらず，外や地域とかかわりあう姿勢が欲しい。親の居場所を認めることが大切である。

第二に必要なものは，「**生活リズム**」であるという。

親の中には，子どもにとって正しい生活リズムは何であるかという認識がない。生活リズムの形成は，生まれてからが最重要である。保健師による生活リズムの大切さに関する指導をとりいれている支援センターもある。しかし，支援センターに来る親子に，生活リズム等の話をするのは，非常に難しい。生活リズムの形成は，親にも，繰り返して行う根気が必要になってくる。

第三に，「**マナー**」があげられる。親としてのマナー，社会的ルール，規則を知る必要がある。まず，親でさえ，あいさつができないという現状がある。あいさつの大切さを知る必要がある。また，親が話を聞くことができない。親にも話

を聞く態度が必要である。さらには，自己中心でなく，相手を思いやる必要がある。とくに感謝の気持ちをもつことが必要である。

おじいちゃん，おばあちゃんが，子どもに遠慮している風潮があり，それらが，親世代のわがままさを増長させているかもしれない。

利用者のなかで要注意人物をどのように扱うのかが難しい。心理的サポートもどこまでおこなえばいいのか分からない。

第四に，「**子どもへの愛**」が必要だと考える。子どもを育てる上での責任感をしっかりと持ち，子どもへの関わり方を見つける必要がある。虐待というような子どもへの愛が欠如している報告がよくある。これらの対処法として，親としての正直な思いを語り合うことが必要である。親が子どもの好きなところについて話すのもいい。子どものいいところを，例えば5つなら5つ，あげるというような手法も，いいかもしれない。子育てが楽しいということを知らせていく必要がある。どんな子どもに育って欲しいのか，親としての願いを持つことが大切である。子どもをかわいいと思い，こどもの居場所を知っておく必要がある。

第五に，「**親の心身のリフレッシュ**」が必要だと考える。困ったことを人に話したりして，リフレッシュやストレス解消の場を設けることが大切である。子どもが，支援センターで保育を受けている間，親を対象とした各種講座（子ども抜きで）を受講して，気分転換をおこなうよう援助するケースもある。親が自分を知り，親自身に目標があることが大切。体力も経済的安定も必要だろう。

第六に，「**情報提供**」があげられる。支援センターの役割を知らせるのが第一だが，子どもとの関わり方，子どもの発達について知らせるとよいだろう。バスの情報，トイレットトレーニング，病院等についての情報提供なども大切である。家ではできないことを体験できるようにする。来る親が心地よく，すごすための情報提供を模索したい。

Bグループ

第一に，「**友達**」が必要である。ここでいう友達とは，話し相手，子育て仲間，悩みを話せる人，悩んだり困ったときに話しを聞いていくれる人，親が気軽に話せる人である。親は，近所に友達がいなくて友達を求めている。あるいは，祖父母といっしょに住んでいても頼らないし，アドバイスをきかない。祖父母とのきずなが薄れているように感じられる。

一人で子育ての問題を抱かえ込まず「おねがいね」といえる人がいるような状況をつくりたい。親がグループでかたまって話すのではなく，誰とでも話せることが望ましい。支援者は親さんと話しをして信頼関係を作ることが大切である。長期的視点で，信頼関係を構築したい。

他方，子育てサークルへの支援も大切である。

第二に，親には「**マナー**」が必要である。ここでいうマナーとはとくに，話しを聞くマナーである。たとえば，乳幼児学級の講座があってもおしゃべりばかりしている。講師が子どもは親の姿を真似ると注意したらすこしは様子が変わった。

また，絵本を読んでいると子どもは前に出てくるが親は後ろでおしゃべりしている。それにも注意が必要である。子どもが悪いことをしてもしかれない。危険なことについても常識的判断ができない。たとえば，高いところに登るとあぶないと注意しているのに子どもが再度やっても知らない顔でいる。

第三に，親の「**ゆとり**」が必要と考える。ちょっと工夫すること，たとえば時間の使い方など自分がうまくいくように考えると，うまくいく。

第四に，親の「**リフレッシュ**」が必要と考える。自分の時間は，家族の時間と同じくらい必要なものである。一時預かりや一時保育を利用する。託児つきリフレッシュ講座（A市では無料のヨガ講座が人気。親がリフレッシュできると申し込み開始から午前中でいっぱいになる）が開催されている。

第五に，「**親子で向き合うこと**」が必要である。支援者（保育士・幼稚園教諭）に遊んでもらうことがよいと思っている親がいるが，親自身が子どもと遊んであげることが大切とわかっていない。どうやら，支援者にまかせていればラクだと思い，「いっといで」と子どもを手放し，親

は親でおしゃべりしている実態がある。親が子どもといっしょに遊んで共感すること。子どもに親が向きあってかかわることで，自分たちも楽しめ，子どもも遊べる。

第六に，「**家族**」。とりわけ父親の存在が必要である。クリスマス会にお父さんの参加があって子どもがとてもニコニコしていた。おたよりにそんな姿をのせたらお母さんも喜んだ。

第七に，「**広報**」。参加されない方にどう来てもらうか関わってもらうかが大切であると考える。支援センターのことは知っていても，なかなか一人ででてこれない人がいる。来所されても友達ができない人への支援が必要である。

そのほかに，受身の親さんに行動をおこしてもらうのにはどうするとよいか。親指導，親支援をどうやって学ぶのか。グレーゾーンの子の増加にどのように対応するかが問題だという話もでた。

以上を簡単にまとめておこう。

両グループでは，子育てに必要なものは何かに対して，①親の仲間（友達），②マナー，③子どもへの愛と理解，④親の心身のリフレッシュ，⑤情報提供があげられる。

これらにそって，支援者に求められる課題も含めて，討論した。対応策としては，支援者の増員，支援者の研修の充実があげられる。また，相談室など，ハード面の充実も必要だろう。

こうしたインタビュー調査・質的調査では，これまで統計的に把握した内容と重複する部分もあるが，詳細に支援者の悩みや課題，思いを聴くことができ，非常に有効であった。質的調査は量的調査に比べて学術的価値が見劣りし，客観性がないと批判されることもあるが，逆に，統計的調査では見落としがちな支援者の実感をくみ上げてここに文章化（データ化）することができた。それについては一定の貢献をなしえたと考えられる。

また子育て支援者トーキングでは，KJ法を用いて課題を書き出すという作業（グループワーク）により，支援者同士の交流が進んだとも考えられる。研修の機会も必要であるが，まずはこうした支援者同士の交流も大切であると考えられる。

5．考察―支援者の研修の重要性

本稿の冒頭に述べたふたつの調査で明らかになったように，岐阜県においては，子育て支援策の一環として，地域子育て支援事業は充実しつつある。保育所や幼稚園，他の諸機関で行われる事業も徐々に広がりを見せ，全体として確実に発展しつつある。

もちろん，本格的に始動しはじめてようやく数年といったセンターや保育所等も少ないとはいえない。だが，他のセンターの事業を参考にして，園庭開放や行事，一時保育，子育て相談業務などの子育て支援事業を安定して実施できるようになっている。それに加え，それぞれのセンターの立地条件や諸条件を勘案して創意工夫を凝らすようになった。

たとえば，未就園の3歳未満の子どもにとって，子育て支援センター事業で開放される園庭は，便利で有益な遊びの場でもあり，親にとっても憩いの場となりつつある。また，支援者と何気ない会話をするなかで，利用者は何気ない子育てに相談をすることもあり，支援者はそれに応えている。岐阜県においては，子育て支援事業が親の負担そのものを軽減する一方で，相談業務を通じて「負担感」も軽減できている。

４，５年前の調査の時点では，事業の年数が浅く，支援者の経験もあまりないことから，独自の取り組みを見出せず，画一的な事業を行うことで精一杯という様子も垣間見えた。相談業務にも戸惑いがあった。それを振り返れば，この数年で飛躍的に子育て支援は進歩したといえる。

端的に言えば，今回，この調査によって明らかになったことは，支援者の自主的で積極的な取り組みによって，支援事業そのものはかなり安定し発展し，子育て支援活動そのものへの不安や悩みなどは少なくなったということである。しかし，依然として，保育室などの施設などのハード面は充実しておらず，しかも，人材育成・研修などのソフト面が立ち遅れていることも明

らかになった。さらに，支援者は，子育て支援者として十分な研修を受けておらず，相談業務についてまだまだ戸惑うことが多いようである。それでも，支援者は，センターの子育て支援活動の推進者としての能力をもっと発揮したいと考えている。意欲は十分にある。それだけに，かえって一層，支援者の研修，人材確保とその安定供給の問題が課題となって浮き彫りにされるのである。

繰り返すようだが，支援者は，保育者（保育士・幼稚園教諭）としては十分な経験を積み，その分野での研修は受けている。だが，両親をはじめとする養育者の心身にかかわるさまざまな保育の問題やそれ以外の問題の相談に対処する力量を完全に十分と断言できるほどには身につけていない。それは，ひとえに支援者に帰せられる問題ではなく，支援者の力量を高める施策，とりわけ研修の機会を十分に提供してこなかった各自治体や行政，研究施設の問題であろう。

さらに，支援者は短い場合は3年から5年程度で職場をかわるために，その力量を向上させることもできず，しかも，事業をさらによりよいものにすることができないでいるようである。こうした点で，まずは子育て支援者の研修を充実させることが急務であろう。

6．具体的な研修の提言にむけて

本稿においては，岐阜県の子育て支援について次のように提言したい。

（1）ワークショップ型の研修機会の提供が必要

他の支援センターに属する支援者同士が，お互いに情報交換をし，意見を交換できる場を設けることができないだろうか。今回の子育て支援者トーキングは，そのような場であったが，研修機会の提供として，手前味噌ではあるが，非常に有益な機会であったと考えられる。講師を招いてお話を拝聴するという一方通行の研修ではなく，ワークショップ形式で，自主的に研修を進めるような双方向的な研修の機会が必要である。そのためには，大学教員などがファシリテーターとなって，そうしたワークショップ型の研修機会を提供するようにすればいいのではないだろうか。

（2）各地域で連携の可能性を模索することが必要

子育て支援センターだけではなく，各地域の保育所・幼稚園，小学校，保健センター，子ども相談センター（児童相談所），子どもに関する福祉施設など，さまざまな機関により，子育て支援の連絡協議会を立ち上げ，年に数回程度の連携を図るようにすれば，支援センターも他の機関と協力して子育て支援を進めることができる。

（3）支援者の研修プログラムの開発が必要

子育て支援事業従事者の力量を短期間で飛躍的に向上させることができるプログラムを開発することが喫緊の課題である。支援者はかつて保育者であり，子どもを対象にする仕事をするうえで十分な経験と識見がある。そのような経験に加えて，子育て支援事業従事者としての親を指導する研修プログラムを経験すれば，5回程度の研修で，十分な力量を育てられると予想できる。今後はそうした課題と取り組むべきであろう。

具体的に言えば，支援者は，子どもを連れた親と出会い，親とコミュニケーションする技術や知識を身につけなければならない。たとえば，カウンセリングの技術や，子育て支援特有の専門の知識も必要となる。現在ではそうした研修は皆無である。今後，支援者対象の研修プログラムを開発し，そのような知識と技術をもつ子育て支援センター事業者が岐阜県の各地で勤務すれば，子育て支援は充実することは間違いない。

（4）子育て支援事業の実態を把握し報告する機会を設けることが必要

狭い地域であっても，他の子育て支援の機関が，お互いにどのような子育て支援活動を行っているのかわからない場合もある。定期的に調査をしてデータ化し，それを子育て支援機関にフィードバックして，今後の岐阜県の施策・独自の政策として子育て支援事業をより充実させ

る必要がある。

本研究の目的は，子育て支援センター事業の資質について実態を明らかにするとともに，研修の機会を把えて，自らの資質の向上にどの程度つとめているかを実証的に明らかにすることであった。このような研究調査は先行研究がほとんど見当らないため，研究としても是非とも必要であった。今後は地域の子育て支援を充実させるだけではなく，全国的に発信できるように準備することが必要であろう。

子育て支援事業は，支援者の専門性を高めることでさらに効果的になることが期待される。地方自治体や研究機関が，よりよい研修の機会を提供する必要がある。

註記

1　本研究は，平成19年度　岐阜大学活性化経費（地域連携），事業名：地域子育て支援センター事業従事者の資質向上に関する研修プログラム開発，代表者：今村光章　共同研究者：今村民子・居﨑時江・高田全代・徳広圭子，による事業の成果および研究である。

2　東濃の支援センターの一覧表については，研究上の情報としても，今後の支援センター利用者への情報提供としても必要と考えられるため，住所等を記載した。住所等の基本情報すでに各自治体で公開されている内容でもあるため問題はないが，事業内容については，毎年，おそらく変更点が多々あるものと考えられる。資料活用の際は留意されたい。

3　今村民子・今村光章は，偶然，同姓であるだけで，婚姻・親子・親戚関係ではない。

東濃の支援センターの活動の一覧

地域子育て支援センター名	多治見市	ひまわり子どもの家	中津川市	中津川市
保育園名	共栄保育園		一色保育園	坂本保育園
住所	多治見市高田町１－64	多治見市笠原町1194－１	中津川市東宮３－29	中津川市茄子川692－12
郵便番号	507-0018	507-0901	508-0036	508-9132
電話番号	0572-23-2199	0572-43-3400	0573-66-1330	0573-68-2224
開設日	月～金 （祭日と12月29日～１月３日は休み）	月～金 （祭日と12月29日～１月３日は休み）	月～金 （祭日と12月29日～１月３日は休み） あそびのひろば（９：00～13：00） 毎月第１木曜日　０歳児の日 〃　第２木曜日　１歳児の日 〃　第３木曜日　２歳児の日 〃　第４木曜日　全体の日	月～金 （祭日と12月29日～１月３日は休み） 毎週木曜日 毎月第１木曜日　０歳児の日 〃　第２木曜日　１歳児の日 〃　第３木曜日　２歳児の日 〃　第４木曜日　全体の日
開設時間	８：30～16：30	９：00～16：00	９：00～16：00	９：00～16：00
支援内容	絵本の日（年20回）毎月第２・４水曜日 親子広場（年７回） 「スタンプ遊び」「どろんこ遊び」など 気ままにおしゃべり（年２回） 行事解放（年３回） 「軒ふき見学」「運動会」「節分」 プール開放（年４回） 児童館まつり 各種講座（年５回） 「親子でリトミック」「親子でヨーガ」 「食育講座給食試食会」「お父さんと運動会」 「リフレッシュ講座・ヨーガ」 人形劇観賞	育児相談（随時） 園庭・支援ルーム解放（開設時間中） 乳幼児学級の開催（月１回） ２歳児対象「めばえ教室」 ３歳児対象「ひよこ教室」 育児サークル支援 ＊活動計画，内容，活動場所の提供 ちびっこ広場の開催（月１～２回）	育児相談 年齢別親子交流 （あそび・リズム・制作・食事・絵本の読み聞かせ・絵本紹介など） 子育て情報の提供 園行事への参加	育児相談 毎週木曜日 （年齢に合った歌・手遊び・つながり遊びリズム体操） 園庭遊び 地域の広場に出かけて遊ぶ プール遊び クッキング・食事交流 手作りおもちゃを作る 演劇を観る 制作活動 交通安全教室 園の運動会に参加 その他季節，年齢に見合った遊び 食事をとりながら，親さんの話にじっくり耳を傾け，悩みに対してひとつひとつていねいにかかわり，共感したり，励ましながら子育てのアドバイスをする
一時保育	月～金　８：30～16：30の間　有料	実施していない	実施していない	実施していない
機関紙	「のびのびすくすく」月１回発行	「子育て支援センターだより」月１回発行	「あそびのひろば」年11回発行（月１回）	「なかよしひろば」月１回発行 地域の広報紙に掲載

地域子育て支援センター名	瑞浪市 おんぶにたっこ	瑞浪市 愛モア	恵那市 こども元気プラザ（2008年１月18日より開設）	
保育園名	稲津保育園	みどり保育園		やまびこ保育園
住所	瑞浪市稲津町小里697－１	瑞浪市下沖町２－10	恵那市長島町中野414－１	恵那市長島町久須見182
郵便番号	509-6103	509-6111	509-7205	509-7206
電話番号	0572-66-1064	0572-66-1375	0573-25-1155	0573-43-2209
開設日	月～土 （祭日と12月29日～１月３日は休み） 相談時間は 月～金（９：00～16：00） 土（９：00～12：00）	月～土 （祭日と12月29日～１月３日は休み） 相談時間は 月～金（９：00～16：00） 土（９：00～12：00）	火～土 （日・月・祭日と12月29日～１月３日は休み） 活動時間　９：45～11：30 昼食時間　12：00～13：00	月・水（３月まで） 水曜日（４月から） 金曜日（４月から武並保育園）
開設時間	９：00～12：00	９：00～12：00	９：00～18：00	10：00～11：30
支援内容	年齢別サロン ０歳児・１歳児・２歳児～就学前クラスに分け月各３回実施 年齢別親子遊び ０歳児　毎月１回 １歳児・２歳児～就学前クラス　隔月 電話相談　面接相談 青空広場 ちびっこ運動会 クリスマスコンサート 講習会 「心肺蘇生法」「絵本の読みきかせ」「リズム」 「ふれあいあそび」など	年齢別サロン ０歳クラス　金曜日 １歳クラス　木曜日 ２歳～就学前クラス　火曜日 親子教室 ０歳児親子ふれあい体操　月１回 １歳児親子遊び・２歳～就学前クラス　隔月１回 パパサタディ　毎月第２土曜日 青空広場　年２回 ちびっこ運動会 クリスマス会 講習会 「心肺蘇生法」「絵本の読みきかせ」「リズム」 「ふれあいあそび」など ママスタッフ講習会　毎月１回 地域に出向く おしゃべりサロン　市内27カ所 子育て支援センター出前教室　毎月１回 １歳児すくすく教室 保健センターへ出張指導　月１回 サークル支援 双子をもつ親の会　場所提供と子どもの世話 他サークル　荷物の保管，お便り印刷と掲示など		にこにこ広場（園内遊戯室） 年齢別クラスによる活動 遊戯室開放　月１回 人形劇鑑賞 父親子育て広場 育児講座 ぷちにこ広場（ふれあいの家） 15組限定による活動 交流保育・園行事参加 「お楽しみ会」「運動会」 PR活動 ７ヶ月健診　たまご学級 育児相談　電話・面接 育児情報の提供 育児通信月１回配布 育児講座の案内 がやがや会議 サークル支援活動講師出向 乳幼児学級交流会 保育園への出向　（地域の未就園児の親子広場）
一時保育	ファミリーサポート事務局 依頼会員312　援助会員35	実施していない		実施していない
機関紙	広報みずなみの折り込み（年２回）全戸配布 広報紙に掲載 子育て支援センター機関紙発行（月１回）	広報みずなみの折り込み（年２回）全戸配布 子育て支援センター愛モア　毎月１回発行 子育て支援センターのしおり　年１回		おたより　月１回発行 恵那市広報（月１回）

地域子育て支援センター名	岩村	山岡	明智	吉田
保育園名	岩村保育園	山岡保育園	明智保育園	吉田保育園
住所	恵那市岩村町岩村1545－１	恵那市山岡町上手向中洞1155	恵那市明智町1391－１	恵那市明智町892－２
郵便番号	509-7403	509-7603	509-7718	509-7723
電話番号	0573-43-2209	0573-56-2255	0573-54-2030	0573-54-4545
開設日	毎週木曜日 第１木曜日　２～３歳児対象 第３木曜日　０～１歳児対象 第２・４木曜日　０～３歳児対象	わくわく広場 毎週月曜日　１歳児 毎週金曜日　２歳児 第３水曜日　０歳児 園庭解放　毎週月～金（９：00～17：00） 子育て相談　毎週月～金（９：00～17：00）	毎週木曜日 年齢別 月２回　にこにこサロン　０～２歳児 月１回　めだかサロン　２歳児 月１回　ぴよぴよサロン　０～１歳児	毎週火曜日 （時々明智保育園と合同で活動する日もあり曜日が変更することがある）
開設時間	10：00～11：30	９：30～11：00	９：00～11：00	９：30～11：00
支援内容	園庭開放 手遊び・ふれあい遊び・読み聞かせ（ボランティア） 保健センター７ヶ月健診でのPR 行事 ５月　開級式 ６月　保健師集団指導 ７月　七夕飾り作り・プール遊び ８月　夏祭り・プール遊び ９月　音楽リズム遊び・人形劇観劇 10月　運動会参加・保育園児との交流・芋掘り 11月　遠足　子育て講演会 12月　クリスマス会 １月　お正月・節分遊び ２月　人形劇観劇 ３月　お楽しみ会 恵那市子育て支援合同行事	手作りおもちゃつくり 園庭でのリズムあそび 散歩 紙芝居 手遊び　パネルシアター リズム遊び 子育て相談 行事 ＊手作りおやつ試食会（年５回） 食生活改善委員の人たちの手作りおやつ試食 ＊人形劇観劇 ＊演奏会 ＊クリスマス会 ＊お楽しみ会 ＊保育園の行事に参加 「夕涼み会」「運動会」「節分」	園庭開放 育児相談 季節の遊び 「七夕」「プール」「運動会」「シャボン玉遊び」「クリスマス」など 観劇・リトミック 食生活改善委員の人たちの手作りおやつ試食 恵那市子育て支援合同行事 手作りおやつの紹介（保育園） 絵本の貸し出し	４月　自己紹介 ５月　外遊び ６月　リトミック ７月　七夕会　おもちゃ作り ８月　夏まつり　プール遊び ９月　しゃぼん玉 10月　運動会に参加　遠足 恵那市子育て支援合同行事 11月　リトミック 12月　パネルシアター　クリスマス会 １月　お正月遊び・人形劇 ２月　冬遊び　手型を押す ３月　人形劇　お楽しみ会　２歳児半日入園 月１回お弁当の日 隔月でおやつ試食会・絵本貸し出し
一時保育	実施していない	月～土　８：30～16：30 有料	実施していない	実施していない
機関紙	通信「つくしちゃん」月１回発行 子育て支援センターだより 恵那市広報「えな」毎月１回	機関紙「わくわくだより」　月１回発行 恵那市広報「えな」月１回	「あそびのひろば」月１回発行	「あそびのひろば」月１回発行

地域子育て支援センター名	上矢作 あゆっこ	土岐市	土岐市
保育園名	上矢作保育園	ひだ保育園	つまぎ保育園
住所	恵那市上矢作町下720－１	土岐市肥田町肥田2285－１	土岐市妻木町1357
郵便番号	509-7512	509-6115	509-5301
電話番号	0573-54-2030	0572-55-0337	0572-57-5377
開設日	毎週水曜日 毎週金曜日は園庭開放	園庭開放　行事のない月～金　10：00～11：00 子育て相談　月～金　９：00～16：30 遊びの教室　10：00～12：00 親子あそび　10：00～11：00 親子サークル　10：00～11：30	月～土 （祭日と12月29日～１月３日は休み）
開設時間	９：30～11：30		９：00～17：00（月～金）
支援内容	参加親子の交流 あそび・リズム・制作・おやつ作り 子育て情報の提供 育児相談 園行事への参加　園児との交流 誕生会　お弁当持参の日（月１回） 講師による絵本の読み聞かせ，講話，リトミック おもちゃ作り，部屋飾り， 食育（食の話，おやつ作り） 人形劇　クリスマス会 園の運動会に参加 その他季節に合った遊び	子育て相談 電話・面接相談 保健センター（４ヶ月，１歳６ヶ月，３歳児健診） （乳幼児相談日） 遊びの教室「わくわくひろば」 １歳６ヶ月健診において言語面で要観察と診断された幼児を対象 親子あそび　手あそび，絵本の読み聞かせ，リズムあそび，ペープサート，パネルシアター 親子遊び 毎月５カ所の保育園で開催 年齢別クラスで行う 手遊び，絵本の読み聞かせ，親子ふれあい遊び，リズム，作り遊び，ペープサート，パネルシアター，エプロンシアター 親子サークル 毎月２回 親の希望に添って活動 座談会，ピクニック，おやつ作り，おもちゃ作り，クリスマス会など	育児相談 出張保育　年４回 遊びの広場 4月から３月の12ヶ月 （年齢別サロンを実施しない日） ９：00～14：00 ０歳～５歳までの未就園児対象 年齢別サロン（月６回） ０歳児　２グループ １歳児　２グループ ２，３歳児　１グループ ぴよぴよ　１グループ（H19．４．２以降に生まれた子を対象11月から実施する）
一時保育	実施していない	実施していない	実施している
機関紙	「あゆっこひろば」月１回発行 恵那市広報「えな」月１回	「ほほえみだより・ひだ」毎月１回発行	「ほほえみだより」月１回発行

子育て支援事業者アンケート：（東濃地区）：個別の子育て支援事業従事者対象

1．あなた（記入者）は日頃，子育て中の親子に支援者として直接かかわっていますか。（どちらかに○）

1　は　い　　2　いいえ

2．あなたは支援場面において最初に声をかけるのはどちらですか。（どれか一つに○）

1　子どもに　　2　親に　　3　どちらともいえない

3．あなたは支援場面においてどちらに多く声をかけますか。（どれか一つに○）

1　主に子ども　　2　主に親　　3　どちらともいえない

4．あなたは支援場面の最後に声をかけるのはどちらですか（どれか一つに○）

1　子どもに　　2　親に　　3　どちらともいえない

5．毎日の支援について質問します。以下の項目にあてはまると思うものすべてに○をつけてください。（いくつでも可）

1		まず親の話しを聴かなくてはということを心がけている
2		親の話をよく聴いている（傾聴している）だけでいいのか迷うことがある
3		親と話していて，つい自分の考えを言ってしまうことが多い
4		困ったなあと思っている親の姿があっても何も言えない
5		困ったことをしている子どもがいる時は，子どもをしかり親にも言う
6		相談を受けた時，答えるのに不安に感じることがある
7		来所する親と話したいと思うがなかなかうまくできないことが多い
8		育児にまじめでいっしょうけんめいな親が多い
9		雑誌，インターネットなどで，育児の情報収集に熱心な親が多い
10		子育てサークルなどに積極的に参加する親が多い
11		やってもらうことに参加するだけという受け身な親が多い
12		自主的に活動して，サークルを作る親が多い
13		子どもがあっても自分中心の楽しみを優先する親が多い
14		育児をしている自分に自信をもてない親が多い
15		支援センターの存在を知らない親が多くいると思う
16		支援センターの存在を知っていても出てくることができない親が多くいると思う
17		子育て家庭を訪問する事業があれば，保健師や行政職員とともに支援センター職員も積極的に参加するべきだと思う
18		支援センターにくる親に対して支援することが大切で，来ない親については別の部署が対応するべきだ
19		支援センターに来所する親みんなが子育てを学んでいい親になってほしいと思う
20		自分はどちらかというと子育て支援より普通保育の方が向いていると思う

毎日の支援の中で支援者として気になることはどんなことですか。あれば記述してください。